

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：32520

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23136

研究課題名（和文）ナイジェリアの臨床試験におけるネットワークと知識の生産過程に関する人類学的研究

研究課題名（英文）An Anthropological Study on Networks and Knowledge Production in Medical Research in Nigeria

研究代表者

玉井 隆 (Tamai, Takashi)

東洋学園大学・グローバル・コミュニケーション学部・講師

研究者番号：40845129

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はアフリカの医学研究を検討した。先進諸国と異なりアフリカでは、国外の医学研究所や製薬企業が出資し、感染症に対する医学研究を行うことが多い。本研究は、ナイジェリア・ラゴスの医療機関を対象に、医学研究に関わる多様なヒトとモノの配置と関係の動態を分析することで、科学的知識の生産過程を明らかにするものであった。とりわけ研究期間中にCOVID-19が流行し始めたことに伴い、アフリカにおけるCOVID-19研究の可能性と課題も合わせて検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

持続可能な開発目標（SDGs）では、ワクチン及び医薬品の研究開発支援が明記されている。本研究はSDGs時代におけるアフリカ社会の事情を踏まえた医学研究を分析した点において重要な成果である。加えてCOVID-19は他の感染症と異なり先進国も含む全世界で流行が拡大しており、ワクチンを含む医療資源の不均衡な分配が問題になっている。こうした問題とその歴史的背景を検討した点も重要な成果である。

研究成果の概要（英文）：This research project considered medical research in Africa. Unlike in developed countries, in Africa, medical research on infectious diseases is often funded by foreign medical research institutes or pharmaceutical companies. My research project elucidated the production process of scientific knowledge at medical institutions in Lagos, Nigeria, by examining the positions of and relationships between the diverse people and resources involved in medical research. Moreover, COVID-19 began to spread as I was carrying out my research, and I examined the potential of and issues facing COVID-19 research in Africa.

研究分野：医療人類学

キーワード：医療人類学 ナイジェリア 病院 市民社会

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) アフリカにおける医学研究は、公衆衛生課題に対する国際社会の対策強化、臨床研究に携わる製薬企業や研究機関の連携推進、研究資金の増加等により、1990年代以降急増している。他方でその臨床試験(人体に対して医薬品の投与等の介入を行い、その安全性や有効性を調べるための仕組み)においては、非識字の被験者に対して説明なく同意書に署名させるなど、倫理的に問題とされる試験がアフリカ各地で多く行われてきた。こうした事態に対して、近年では多くの研究が、試験者となるグローバル製薬企業による、被験者となる現地住民に対する「搾取」の構造を批判的に議論している。

しかし、試験者と被験者を単純に二分し対立関係を前提とすることで、臨床試験「本来」の効果であるはずの、被験者が抱える病いの苦痛を緩和する臨床実践や、科学知識の生成過程が十分に議論されていない。そのため被験者を「搾取」される被害者と研究当初から想定するのではなく、グローバル化する医学研究に関わる多様なヒトとモノの複雑な配置や関係を丹念に記述し、その動態を解明することが必要である。ヒトやモノとは、研究委託業者、ドナー、研究施設、試験実施者、試験機材・器具、医薬品、政府関係者/機関、被験者、被験者の家族等が挙げられる。

(2) 本成果報告者は、修士課程から博士号取得までの5年半の間、西アフリカに位置し、サハラ以南アフリカ最大都市として知られる、ナイジェリアのラゴスを対象とした、医療人類学的研究を行った。具体的には、ラゴスの貧困層における病いへの対処をめぐる行動原理と、それにかかわる社会関係の形成過程を明らかにした。具体的な病いとして、世界で年間44万人以上の死者を出す感染症マラリアを扱った。本研究は、そこで培った人的ネットワークと経験を踏まえ、ナイジェリアを再び対象として、医学研究に関する新たな研究活動を行うものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、アフリカの研究機関で実施される医学研究において、多様なヒトとモノのアクターがどのように関係を形成、維持あるいは切断し、その過程でいかにして科学的知識が生み出されているのかを明らかにすることであった。より具体的には、医学研究の過程においていかなるアクターがなぜ、どのように関与しているのか、その結果としていかなる知識が生産されるのか、そうしたアクターの関係と知識生成の連続/断絶性を詳述することを目指した。

3. 研究の方法

(1) 本研究の分析はナイジェリアの最大都市ラゴスにある、国立ラゴス大学医学部付属病院を拠点に行うインタビューと参与観察から得られたデータに基づき実施する予定であった。そのために本研究は、1年目春期、2年目夏期・春期の計3度にわたるフィールド調査をナイジェリアで行うことを企図していた。しかしCOVID-19の流行に伴い、2年目のフィールド調査はいずれも断念せざるを得なかった。他方で様々な先行研究、関係する国際機関・ナイジェリア国内機関が刊行する報告書、インターネット上で得られる情報を分析することで、本研究に必要な資料を入手し調査研究活動を実施した。

(2) また対象となる疾病として、当初はアフリカの代表的な感染症疾患であるHIV/エイズ、マラリア、ラッサ熱、エボラ出血熱に関する研究を扱う予定であった。しかし同じ感染症であるCOVID-19がアフリカを含む全世界で流行を拡大させたことに伴い、COVID-19も具体的な対象として盛り込むこととした。

4. 研究成果

(1) 上述した通り、COVID-19の影響によりフィールド調査は1度しか行われていないものの、フィールド調査を通して、今後の研究の発展の重要な足掛かりと、以下で議論するCOVID-19対応を検討する問いを設定することができた。成果報告者は2020年2~3月にかけて、ナイジェリア・ラゴス州でのフィールド調査を行った。具体的には、ラゴス大学附属病院と国立精神病院を訪問し、予備調査として聞き取りを行った。その結果、いずれの病院においても、医学研究のための設備や資金等が圧倒的に不足していること、そもそもスタッフの給与の未払いもしばしば起こっていること、したがって欧米の研究機関や企業との連携に基づく調査研究活動を行っていることが明らかとなった。

またこれらの機関とは初回の調査ながら信頼関係が築け、今後本調査を行うための手続きについて確認し、ネットワーク構築を図ることができた。しかしながらCOVID-19流行に伴い、その後成果報告者自身がナイジェリアに行けず、また病院関係者もその対応に追われることとなり、2年目のフィールド調査はかなわなかったが、インターネットを通じたコミュニケーションは継続的に行っており、今後渡航が可能となり次第、COVID-19対応も含めた詳細な聞き取りと参与観察が可能となっている。

(2)(1)で示した通り、ナイジェリアでは医療・研究機関が主導するかたちでの医学研究を

行う環境が十分に整備されていない。しかしながら、成果報告者がナイジェリアにおける COVID-19 のインパクトその対応について、インターネット上にある情報収集をもとに調査を行ったところ、その公衆衛生上の対応は、かなりの程度適切に対応できていることが明らかとなった。

一般にアフリカは医療システムの基盤が脆弱であるとされ、医療資源は現在に至るまできわめて限られている。そのため COVID-19 流行当初から、病床数、基礎的な医薬品、医療人材、保健財政等いずれの観点からみても、COVID-19 対応を適切に行うことは困難であるとみなされた。しかし、ナイジェリアはこれまで数多くの感染症の問題に直面し、限られた資源のなかで対応してきたおかげで、感染症対応の豊かな経験値を備えていた。例えば COVID-19 対応を主導した政府機関であるナイジェリア疾病管理予防センター(Nigeria Centre for Disease Control: NCDC) は、これまで HIV/AIDS、結核、マラリアという三大感染症に加え、ポリオウイルス病、ラッサ熱、黄熱病、コレラ等の対応の難しい疾病の対策を主導してきた実績がある。加えて、同センター長は 2016 年から現在までチクウェ・イヘクウェアズ(Chikwe Ihekweazu)が務めている。イヘクウェアズは世界各地の感染症対策機関で働いた経験がある。イヘクウェアズはセンター長に就任して以来、「平時」のうちに感染症のアウトブレイクに備えた体制の構築・強化に向け様々な取り組みを行ってきた。同国で COVID-19 患者が発生した際も、患者はラゴス州ヤバ(Yaba)感染症病院で治療を受けた。同病院は 2014 年 7 月、ナイジェリアで初めて確認されたエボラウイルス病患者の隔離と治療にあたった病院でもある。

加えて、COVID-19 においては、「ポリオインフラ」(Polio Infrastructure)が有効活用された。これはポリオワクチンをナイジェリアのすべての子どもに接種するための取り組みの産物である。ここで活躍するのはコミュニティレベルで配置されている多数のヘルスワーカーである。彼らは毎年複数回行われるワクチン接種キャンペーンの際、対象地区に分かれ、自分たちで作成した地図を元に 1 軒ずつ家を回りワクチン接種を呼びかける。この取り組みは保健省のみならず、国連児童基金、WHO、ロータリー財団等のさまざまなアクターが協力して実施されている。「ポリオインフラ」はこうした現場に根ざした長年の経験をとおして獲得してきた人びとの信頼と実践の蓄積である。COVID-19 流行下における接触者の追跡や情報提供の場面においても、このインフラが利用された。

(3) 以上の(1)(2)を踏まえつつ、ナイジェリア含むアフリカにおける COVID-19 にかかわる医学研究はいかにして可能か、それがかなわない場合なにがその障壁になっているのかを検討した。まず確認されたのは、COVID-19 にかかわる医学研究は、アフリカ大陸がかつてのように医学研究の巨大な「実験場」とならないように配慮がなされていた点である。そのうえで、WHO などが主導して構築した、COVID-19 の診断、予防、治療をめぐる研究、調査、開発、普及を主導する ACT アクセラレーターや、COVID-19 に関する知的財産権、知識、データ等の自発的な共有を目指す「COVID-19 技術アクセス・プール」(C-TAP)の設立と、それらの背景に関する情報収集を行った。

その結果、COVID-19 にかかわる医学研究がアフリカにおいて推進されない障壁は、アフリカ側の医療研究の環境のみならず、COVID-19 をめぐる医学研究で行使される知的財産権が問題となっていることが明らかとなった。COVID-19 をめぐっては、その予防、診断、治療にかかわる開発(ワクチン、マスク、治療薬など)は欧米のグローバル企業が中心となり急速に進められている。WHO(世界保健機関)や途上国政府は、上述の C-TAP に代表されるように、そこにかかる知的財産権や技術等を企業が自発的に共有することで、アフリカや途上国を含む世界の企業がその開発を行い、より迅速かつ公平な医療アクセスを達成することができるとしている。WTO(世界貿易機関)ではこの点について激しい議論が続いている。米国は 2021 年 5 月に COVID-19 にかかわる知的財産権の放棄に賛成する立場をとったが、EU やヨーロッパ諸国を含む国々がいまだ反対の姿勢を崩していない。

ここで注視すべきは、こうした国際社会における動きは、HIV/AIDS をめぐっても同様であった点である。HIV/AIDS をめぐっては、1980 年代後半に入り抗 HIV 薬が開発されたものの、知的財産権がゆえにその価格は極めて高額で、患者を多く抱える途上国はそれを入手することができなかった。このため全世界の HIV/AIDS 当事者の人々、NGO が中心となって、特許を含む知的財産権を放棄することを求める動きが全世界的に展開された。COVID-19 の研究開発をめぐることは、HIV 治療薬の経験と同様の構造的な問題があり、この問題に関与する各国政府、WHO を含む国際機関、そして大規模なグローバル規模の運動を展開している。アフリカにおける COVID-19 にかかわる医学研究は、こうした知的財産権の保護が一つの要因となって積極的に推進されにくい状況下にあることが明らかとなった。

以上(1)~(3)で示したように、本研究が感染症を対象としていたことから、COVID-19 をめぐる今日最も重要性の高い感染症を事例として、アフリカの現状と対応から、マクロな政治経済的状况からみた問題の解明に至る広範な研究を、国際機関、ナイジェリア国内機関が発行した報告書、メディア等の情報を踏まえ行うことができた。今後はナイジェリアですでに構築した人的ネットワークを駆使しつつ、ナイジェリアでのフィールド調査に基づくデータからの分析を行っていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 玉井 隆	4. 巻 57
2. 論文標題 2019年ナイジェリア国政選挙 プハリ大統領再選の背景と今後の課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アフリカレポート	6. 最初と最後の頁 73～79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24765/africareport.57.0_73	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 玉井 隆	4. 巻 59
2. 論文標題 ナイジェリアにおけるCOVID-19の経験 ロックダウン下において生起する暴力	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アフリカレポート	6. 最初と最後の頁 28～41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24765/africareport.59.0_28	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 玉井 隆	4. 巻 65(7)
2. 論文標題 水上スラムから眺めるナイジェリア	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 月刊「地理」	6. 最初と最後の頁 101～107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 玉井 隆
2. 発表標題 COVID-19に対する医療アクセスをめぐる問題と市民社会の対応：NPO法人アフリカ日本協議会のアドボカシー活動を中心に
3. 学会等名 日本アフリカ学会第58回学術大会公開シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 玉井 隆
2. 発表標題 コロナ時代のアフリカと医療
3. 学会等名 東洋学園大学公開講座（リベラルアーツ）（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 玉井隆	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 300
3. 書名 治療を渡り歩く人びとーナイジェリアの水上スラムにおける治療ネットワークの民族誌ー	

1. 著者名 玉井隆（ほか計15名・牧野久美子／岩崎えり奈（編））	4. 発行年 2019年
2. 出版社 旬報社	5. 総ページ数 471
3. 書名 新世界の社会福祉第11巻アフリカ／中東	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------